注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ＬＩＡＲ　ＧＡＭＥ　ーキマグレー

【作者名】
におい菌

【あらすじ】
貧乏な里花はＯＬ達の会話により、ライアーゲームの存在を知った。
彼女はコレに参加すると決意した。
だがそこには幼馴染でありギャンブル仲間の黒井が居た。
そして、彼との金の奪い合いのゲームが始まった。

始まり

貧乏。裕福。一般。
この世は三つの種類の人間で分ける事ができる。
私はその中では貧乏に入るだろう。
古びた服。段ボールの部屋。騙されて得た商品。有り金５０００円。今の私にはこんな粗末な物しか残っていない。
何もかも信じていてはこの世は生きていけない。
それをこの状況にまで落ちる事で理解した。
そんな絶望の中。
一つのＯＬ達の会話が耳に入ってきた。

「ねぇ。ライアーゲームって知ってる？」

ライアーゲーム。私には何故かその言葉が自然に耳に入ってきた。

「何それぇ？」

「超～金が儲かるんだよ！すごいでしょ！」

「何それ気になる気になる。何処であったりするの？」

「ほらこの近くのさ、豪華なホテルあったじゃん。」

「あ～。あれね。何故か潰れた所でしょ。」

「あれ買い取られたらしいんだ。ライアーゲームするために。そして私はこれに参加するのだ！ふふふ。」

「・・・。私も参加していい・・？」

「全然大丈夫だよぉ。そこのホテル行ったらいいだけだし。」

「ホント！じゃあ参加する！いつあるの！一緒に行こうよ！」

「ふふふ。あせりなさんな。今日なんだよ！今日！」

ここまで聞いた時には彼女。つまりホームレスの身体は動きだしていた。

「さて・・と・・・。どうすっかな。」

とりあえず、有り金で今着ている服装を整えようと、考えた。
女性の本能だろうか。
ちょうど近くに古着屋があった。
そこで彼女は服を買うことにした。
そこにあったものは古びた服ばかりだが、彼女には豪華な品に見えた。
そこで有り金の半分くらいを使い果たし、服を買った。
まだ昼だ。
彼女はこういう金を稼げるゲームは夜にあるという印象が強かったため、日が沈み始めた頃に、ホテルに足を運んだ。

「ここ・・だったかな・・・。」

「あなたは今回のゲームの参加者ですか?」

黒服に身を包んだ男が彼女に話しかけた。

「え?!あ、はい・・・。」

彼女は一瞬驚いた後、平静を取り戻したかのように返事をした。

「では、こちらへ。楽しんでいってください。」

男は強張った顔に似合わないニヤケ顔を浮かべ、彼女をホテルの中へ案内した。

「あの・・。これからどのようなゲームがあるんですか?」

彼女は黒服に尋ねた。

「命とか掛けたりするものではない・・・ですよね・・?」

彼女は表面状では怯えていたが、内心では恐怖と期待で心が弾んでいた。

「何言っても答えてくれませんか・・・。」

彼女は心の中で呟いた。

「こちらでお待ちください。」

部屋には机。その上にカード。そして、高校の時の唯一の男友達で

ある『神崎　黒井』がいた。

「黒井!?」

黒井　友和。見た目はスラッとした痩せ型で、黒が多めのフードコートを身に纏い、対象的な白のジーンズを履いている。全体的に見ると、不良的イメージをかきたてられる。そういう奴だ。

「やぁ。里花。久しぶりだね。高校以来だから・・・、5年ぶりかな?」

「あんたも相変わらずだね。またギャンブル?」

「それは里花が言えた口じゃないだろ。まったく。」

今さらだが、彼女の名前は真島　里花。ギャンブルが子どもの頃から好きな女性。
どんな負けさえも彼女にとっては、それもギャンブルの楽しみの一つだった。
しかし負けすぎてホームレスである。
黒井は彼女とは逆で、ギャンブルが上手かった。

「「ザァアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」」

激しいノイズ音と共に天井近くにあるテレビに映像が流れだした。

「どうも。こんばんは。私がディーラーです。今回私のライアーゲームに参加して頂き誠に感謝しております。」

映像に映る仮面を被った男が話した。
仮面が笑った顔だった。
それも、不気味な笑い方ではなく、満面の笑みといった感じだ。

「うわぁ・・・。楽しそう・・・。でも怖い。」

黒井は、最後の「でも怖い。」だけは小声で言った。

「まず、あなた達二人には最初の持ち金を決めるためにあるゲームをしてもらいます。」

ディーラーが続ける。

「その名も・・・・。」

「サイズゲーム」

「です。」

何故かいちいち間をあけて話した。

「サイズゲーム？」

里花、黒井共に尋ねた。

「はい。その名の通り、数の大きさを競うゲームです。」

仮面の男の話が続く。

「ルールはこちらです。」

そう告げると画面に文字が映し出された。

〈ルール〉

・まず、テーブルにある15枚のカードから5枚、好きなカードを選ぶ。

・攻撃、防御にはそれぞれ別のカードを使う。

・カードにはそれぞれ数字がかかれてある。そして、お互いに選択した5枚のカードの中からカードを選ぶ。

・カードは選んだ後、シャッフルして場に置く。

・防御側が攻撃側のカードを選ぶ。防御側は自分のカードを確認する事ができるが、攻撃側は確認できない。

・勝負をする際、攻撃側は15分間防御側のカードを選ばない場合はタイムアップになり、ターンが強制終了される。

・そして攻撃側は相手に4回質問ができる。

・カードを選ぶ前に質問をする事もできる。

・防御側はその質問の答えに一度だけ嘘をつく事ができる。

・そして、数の大きさを競う。

・勝負に勝てば、相手の金を貰える。

・勝負を破棄する場合は戦争放棄と書かれたボタンを押し、その回の勝負を無効化させる。

・勝負を無効化させた次のターンでは質問が3回しかできなくなる。

・攻防共に3回行い、終了。

〈禁則事項〉お金を渡してください。

・防御側は相手の質問に対し、1回しか嘘をつけないため、2回以上嘘をついたら相手にお金を渡してください。

・質問での数を特定させる質問は1回しかできない。

・カードは触る事ができない。触った場合は、そのカードを選択したことになる。

・2回以上タイムアップをしてはいけない。タイムアップした場合も相手にお金を渡さなければならない。

・暴力行為の禁止

「以上でルールの説明を終了します。質問がある場合はどうぞ。」

「特にないぜ。」

「私もよ。」

「では今からリハーサルの代わりで1ターンだけ、ゲームをプレイしてもらいます。こちらはリハーサルですが、負けた場合は相手にお金を渡してください。」

「では、ゲームスタートです。」

里花の顔は強張った。

が、黒井はいつもどおり、ヘラヘラしていた。

「ではコイントスで先攻を決めます・・・チャリーン。コイントスの結果、黒井様の先攻でゲームを開始します。」

「よし。じゃあ始めるぜ。」

「では私は失礼させて頂きます。では、楽しんでいってくださいね。」

プツンとＴＶが消えた。

「ふぅ。疲れたー。」

先程までのディーラーとは思えない程ぐったりしていた。

その証拠に仮面を外して、座り方が椅子に寄りかかるようだった。

「今は仮面外さないほうが良いですよ。一応仕事中ですし。」

別のディーラーが先程まで満面の笑みの仮面を被っていたディーラーに話しかけた。

その別のディーラーの仮面は悲しい顔をしていた。

「別にいいでしょー。今くらいゆっくりしてても。てかお前の所の勝負は終わったの？」

「はい。組み合わせが悪かったようでして…。見ているのがつらかったです・・・。」

「それは奇遇ですね。こちらも少し組み合わせがまずいようです。どうせですし、一緒に観ますか？」

「そうさせてもらいます。」

「じゃ。こちらに座って。」

ディーラー達は監視カメラで里花達を観た。

「カードはこんな感じかな・・・。」

黒井が独り言を呟きつつ、カードを選らんでいる。

「お前はもう決めたか？」

「（カードか・・・。普通ならちゃんと考えて選ぶんだろうけど・・・。適当でいいや！）」

「選んだよ。」

「よし。じゃあ・・・。俺のカードのどれかを選んでくれ。」

黒井はニッコリとした笑顔から、ニヤリとした笑顔に変えた。

〈カード〉□選ばれてないカード・■選ばれたカード・○戦闘放棄ボタン

黒井：□　□　□　■　□

○

里花：□　□　□　□　□

「選んだな。じゃあ質問いくぜ。」

「ゴクリ・・・。」

里花は唾を飲んだ。

「まずは相手の数の基準を決めないとな。お前の持ってるカードの中で、８以下の数字を持つカードをどれでもいいから教えてくれ。」

上手い質問だった。

「あ・・・えーと。ココだよ。」

黒井：□　□　□　■　□

○

里花：□　■　□　□　□

「そこだな。よし。次の質問。今の質問で嘘をついたか？」

「(げ。やべ。)」

里花は察した。黒井がこのゲームについて考えて行動している事を。自分とは違う事を。

「は、はい・・・。つきました。」

「これでもうお前は嘘をつけない。じゃ、こっからが本番だな。質問いくぜ。」

黒井の猛攻は続く。

「ん？いや、待てよ。」

黒井は何かを思いついたようだ。

「なぁディーラー。」

プツンと音がしてＴＶが点つき、満面の笑みな仮面を被ったディーラーがＴＶに映った。

「はい。何でございましょうか。」

「相手が選んだ俺のカードって確認する事できるか？」

「そうですね・・・。それもおもしろそうですし、良いでしょう。新ルールとして認めましょう。」

「やりぃっ！運良いぜ！」

黒井はガッツポーズで喜びを示した。

「（？。自分の質問を減らした？何か意味あるのかなぁ？）」

里花はまだ何も気付いてないようだった。

「では。また用があったら呼んでくださいね。」

またＴＶが消えた。

「よし。じゃあお前が選んだ俺のカードを確認させてもらうぜ。」

「う、うん…。」

黒井：□　□　□　■←確認　□

○

里花：□　■　□　□　□

「っと。あー。運やばいな。ここまで行くと自分が怖くなる。もう勝負するぜ。」

ムカつくような言い方で黒井は勝負宣言をした。

「やばいかなぁ…。」

里花の顔は今更まじめにしなかった事を後悔しているのか、歪みっぱなしだ。

「ふふふ…。俺のカードは１５だ!!!勝負の女神は俺に味方してくれたようだな!!!」

「げ。やっぱ強いの選んじゃったか…。私の数は５だったよ。」

「お前の負けだな。じゃあ。金を渡してもらうぜ。」

里花は仕方なく、１００万円を渡した。

「やはりこちらも組み合わせが悪かったようだな。」

「そのようですね。彼は運が良いし、戦略的に物事を考えれている。

この勝負は彼の勝ちになりますかね…。」

里花には後悔と共に黒井に対する勝ちへの欲求が高まっていた。

「次は私の攻撃だ…。すぐに１００万なんて取り返してやる!!!」

つづく。